

9月9日(水) 研究発表第1室(16号館309)

入学試験が学習ストラテジーに及ぼす影響は卒業時にもみられるか

国際基督教大学 渡部良典

聖霊女子短期大学 石浜博之

本研究の目的は、短大入学時に観察された、入学試験の学習ストラテジーに与える影響が2年後の卒業時にも見られるかどうかを調査することにある。

前回、1990年4月に行われた調査において、入学試験を受けて入学した学生と推薦入学を通して入学した学生の学習ストラテジー使用の比較を行った。その結果、入学試験を受けた学生の方が、推薦入学を通じた学生よりも、より多様なストラテジーを使用する傾向が見られた。具体的には、因子分析の結果得られた5種類のストラテジーグループ (Communicative learning strategies、Compensation and guessing strategies、Socio-affective strategies、Formal learning strategies、Mental operational strategies) のうち、4種類をより頻繁に使用する傾向がみられたのである(統計的有意差あり)。しかしながら、Socio-affective strategies の使用については両者の間に差が見られなかった。

更に、同様の傾向は入学直後の1年生ばかりでなく、短大で1年を過ごした2年生にも見受けられた。試験勉強は学生に様々なストラテジーを使用せしめる効果がある一方、外国語使用の社会心理的側面(例えば、他の学生と協力して学ぶ、気分をリラックスさせる、自分が成功した時には自分を誉める、など)にかかわるストラテジーの使用はあまり促進しない。また、このような試験勉強の影響は、短大就学後1年たっても弱まることはないようなのである。

しかしながら、以上の調査から得られた結果、特に後者の継時的側面については、1、2年生異なった学生を比較して得られたものであり、充分信頼できるものではない。本来ならば、同じ学生が1年を経た後、どのように変化しているか、を考察しなければならないのである。

今回の調査は上に述べた前回の調査の欠点を補おうとするものである。すなわち、1990年4月に入学した学生が当時と比べて、1992年2月、2年間の短大での英語学習を終えた時に学習ストラテジー使用をどのように変化させたか、あるいはさせないか、を考察の対象とする。その際、前回に見られた受験勉強の影響が残っているかどうか特に焦点をおく。

調査対象は、秋田聖霊女子短期大学の英語科の学生合計156名の中から入試、推薦それぞれの学生が同数になるように39名ずつをランダムに選んだ。前回に参加した学生と同じ学生である。

学習ストラテジーの使用傾向を見るためには R.Oxford の考案した Strategy Inventory for Language Learning (SILL) を日本語に翻訳したものを使用した。翻訳にあたっては、調査者がいったん翻訳したものを、英語に堪能な二人の日本人にもう一度英語に移しかえてもらい、原文の意味が歪められているところはもう一度翻訳しなおし、元の質問紙の信頼性を保つよう努力した。

SILL は50のストラテジー項目から成り立っており、それぞれのストラテジーの使用頻

度を1(ほとんど使わない)から5(非常によく使う)までのスケールで答えるというものである。Oxfordは6種類のストラテジーグループ(Memory strategies, cognitive strategies, compensation strategies, metacognitive strategies, affective strategies, social strategies)に分類しているのであるが、中には2種類のストラテジーグループに属するように見受けられる項目もある。そこで、私達の調査対象となっている学生の結果に基づき因子分析を行い、新たなグループを再構成した。その結果得られたのが冒頭で述べた5種類のストラテジーグループである。それぞれの特徴は以下の通り。

Communicative learning strategies: 目標言語を現実の場面で使いながら習得する。

「英語を使う機会を積極的に求める」、「誤りを恐れず英語を使ってみる」、「様々な媒介を通して英語に触れるようにする」などの例が含まれる。

Compensation and guessing strategies: 足りない知識を補いながら習得する。「知らない単語の意味を推測する」、「予測する」、「日本語、パラフレーズ、ジェスチャーなどを使って英語の不足を補う」などの例が含まれる。

Socio-affective strategies: 言語の社会的側面に注目し、言語習得の際感情のコントロールを行う。「ネイティブスピーカーの助けをかりる」、「他の学習者と協力する」、「話すときリラックスするようにする」、「進歩したときには自分を誉める」などの例が含まれる。

Formal learning strategies: 学校教育の一科目としての外国語学習を促進する。

「発音の練習をする」、「新しい単語を何度も紙に書いて覚える」、「レッスンの復習をする」、「学習計画をたてる」などの例が含まれる。

Mental operational strategies: 様々な認知的操作を行う。「言語情報をサマライズする」、「新しい知識を自分のもっている知識に結び付ける」、「イメージとともに単語を覚える」、「知らない単語については分析して意味を推測する」などの例がある。

尚、発表においては、以上の調査結果とともに、短大での授業内容などにも触れる予定である。

9月9日(水) 研究発表第1室(16号館309)

1. 被験者

秋田聖霊女子短期大学英語科2年生 39名(推薦入学)、39名(一般入試)
1990年4月入学生

2. 調査年月

1992年2月2年次授業終了時

3. 質問紙

Strategy Inventory for Language Learning (Version 7.0; by R.Oxford)

Reliability .95 (Cronbach alpha) Original English Version

.93 (Cronbach alpha) Japanese version

4. 前回の結果

Table 1 Overall frequencies of strategy use

	F1	F2	F3	F4	F5
N	143	147	143	148	147
Mean	2.4865	3.3920	2.7951	3.2720	3.0839
SD	.7148	.7418	.6722	.7911	.7455

F1=Communicative learning strategies; F2=Compensation and guessing strategies; F3=Socio-affective strategies; F4=Formal learning strategies; F5=Mental operational strategies

Table 2 Frequencies and ANOVA for Strategy Use in Each Strategy Group

Factor 1: Communicative learning strategies

Method Year	Examination		Recommendation		
	1st	2nd	1st	2nd	
N	37	35	35	36	
Mean	2.5985	2.7510	2.2714	2.3234	
SD	.8410	.6636	.6381	.6045	
ANOVA					
Source of Variation	SS	DF	MS	F	Sig of F
Main Effects	5.436	2	2.718	5.545	.005
Method (A)	5.051	1	5.051	10.304	.002
Year (B)	.468	1	.468	.955	.330
2-Way Interactions					
A x B	.100	1	.100	.203	.653

9月9日(水) 研究発表第1室(16号館309)

Factor 2: Compensation and guessing strategies

Method	Examination		Recommendation	
Year	1st	2nd	1st	2nd
N	37	36	37	37
Mean	3.7399	3.6632	3.1014	3.0709
SD	.5998	.6627	.8228	.6142

Source of Variation	SS	DF	MS	F	Sig of F
Main Effects	13.427	2	6.713	14.614	.000
Method (A)	13.236	1	13.236	28.811	.000
Year (B)	.111	1	.111	.242	.623
2-Way Interactions					
A x B	.005	1	.005	.010	.920

Factor 3: Socio-affective strategies

Method	Examination		Recommendation	
Year	1st	2nd	1st	2nd
N	37	34	35	37
Mean	2.9054	2.8559	2.7486	2.6730
SD	.6472	.6720	.7110	.6623

Source of Variation	SS	DF	MS	F	Sig of F
Main Effects	.794	2	.397	.886	.415
Method (A)	.652	1	.652	1.453	.230
Year (B)	.126	1	.126	.281	.597
2-Way Interactions					
A x B	.004	1	.004	.009	.925

Factor 4: Formal learning strategies

Method	Examination		Recommendation	
Year	1st	2nd	1st	2nd
N	37	37	37	37
Mean	3.4797	3.3514	3.2973	2.9595
SD	.9060	.6051	.8597	.6910

Source of Variation	SS	DF	MS	F	Sig of F
Main Effects	4.115	2	2.057	3.425	.035
Method (A)	2.367	1	2.367	3.941	.049
Year (B)	1.633	1	1.633	2.718	.102
2-Way Interactions					
A x B	.571	1	.571	.950	.331

Factor 5: Mental operational strategies

Method	Examination		Recommendation	
Year	1st	2nd	1st	2nd
N	37	37	37	36
Mean	3.3514	3.2613	2.8964	2.8194
SD	.7326	.6878	.7611	.6824

Source of Variation	SS	DF	MS	F	Sig of F
Main Effects	7.035	2	3.518	6.827	.001
Method (A)	6.618	1	6.618	12.845	.000
Year (B)	.328	1	.328	.636	.426
2-Way Interactions					
A x B	.008	1	.008	.016	.900

5. 今回の結果(発表の際に公表)